

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 唐代小説の中の詩歌

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-25 キーワード (Ja): 唐代小説, 唐詩, 裴君『伝奇』, 小説中の詩, 虚構による創作 キーワード (En): 作成者: 澤崎, 久和 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000217">https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2000217</a>

# 唐代小説の中の詩歌

澤 崎 久 和

ただいまご紹介にあずかりました澤崎です。この四月に、ご縁がありまして本学に赴任致しました。本来であればこのような伝統ある会でいきなりお話ししますのは分不相応なのですが、今日は特に学生の皆さんに何か話をとのことですので、私が近頃関心を持っているテーマの中から、なるべく分かり易い話をさせていたどうかと思っております。お手元に「唐代小説の中の詩歌」と題した資料がおりましてでしょうか。これをご覧になりながらお聞き頂ければ幸いです。

## 一 唐詩と唐代小説

本題に入ります。演題に挙げました「唐代小説」ですが、ご承知の通り、唐代の小説は一般に「伝奇」と呼ばれ、こ

れに先立つ六朝時代の小説は「志怪」と呼ばれます。志怪も伝奇も共に不思議な珍しい出来事を伝え記すといった意味ですが、志怪は事実の記録という意識で書かれ、伝奇はフィクション、虚構という意識を持ちながら書かれたとされます。もとより、唐代にも志怪的な話は少なくなく、また志怪と伝奇の区分はかならずしも明確ではありませんが、唐代になぜ虚構による物語が生まれたのかというのは大きな問題です。今日はその問題自体について論ずるわけではありませんが、それにも関わることをお話しするつもりです。

それから演題の「唐代小説の中の詩歌」の「詩歌」の方ですが、これはここでは単に「詩」といっても同じです。で、そのようにご承知下さい。

ところで、「唐代」と言えば文学史の上ではやはり唐詩

が大きな比重を占めています。私自身、これまで主には唐詩を読んできたのですが、かたわら唐代の小説も少しずつ読んできました。なぜ詩と小説をあわせ読むのか。それは何より、唐代の小説は読んで面白い、という事に尽きるのですが、今少し丁寧によれば、唐詩ばかり読んでいるとどうも唐という時代や文学の一面だけを見ているような心持ちがします。唐代の小説には唐詩には描かれない様々な階層の人々の生活や習慣、思想や宗教、習俗、願望や欲望、喜びや悲しみ、義侠心や一途な思いが描かれる。詩が主には知識人の表の世界を受け持つとすると、小説には有名・無名の人々の内側の世界が描かれる。この両方を読むことで、唐という時代、人々の姿、さらには文学をより具体的に、また深く感じ取ることができる。そういう思いがあります。

実のところ、唐代の詩と小説は共通点も多いのですが、しかし一方、同じ時代の人々が作り上げた作品でありながら、文学としては幾つかの点で大きな違いがあります。お手元の資料をご覧ください。きわめて大まかな対比に過ぎませんが、唐詩と唐代小説の違いを五点、ざっと書き出してみました。

唐詩

唐代小説

- |     |             |    |               |
|-----|-------------|----|---------------|
| (a) | 現実世界を描く     | …… | 現実世界と共に異世界を描く |
| (b) | 人間を描く       | …… | 人間と共に異世界の者を描く |
| (c) | 男同士の友情を描く…… | …… | 男女の愛情を描く      |
| (d) | 政治への高い関心    | …… | 官界からの逃避的傾向    |
| (e) | 儒教的精神       | …… | 道教・仏教的世界観     |

順番に説明致しますが、(a)は、唐詩は一般に「現実世界を描く」のに対して、唐代小説は「現実世界と共に異世界を描く」という相違です。「異世界」とは、神仙界・冥界・異類の世界など、この人間界以外の世界のこと。以下同様に(b)は、唐詩が主に「人間を描く」のに対して唐代小説は「人間と共に異世界の者」、具体的には、神仙・幽鬼・妖異・異類の者などを描くことが多いということです。このうち「幽鬼」は死者のことで、「異類」は虎や狐や猿や樹木といった動植物や、時には無生物が人間の姿に変化したものを指します。

この(a)と(b)とは一体のものです。唐詩にももとより空想的世界や神話的世界を描く作はありますが、大

多数の詩は現実世界の人々の出来事を詠じており、そこにこそ優れた作があります。一方、唐代小説も物語の発端は現実世界、人間世界にあるのですが、しばしばたちまちのうち異世界の人々、人々とは言えないでしょうが、人に非ざる人々が登場し、物語の中に入り込み、物語の舞台自体もまたしばしば異世界に移動します。唐代伝奇の代表作といつてよい「李娃伝」や「鶯鶯伝」のように、始めから終わりまで人間世界の出来事が描かれる優れた作品がある一方で、多くの唐代小説にはこの世ならざる世界が現実世界と交錯するように登場しますし、現実世界であるにしても非日常的な、人間離れをした能力を発揮する人物が登場したりします。またそこにこそ、唐詩の世界とは異なった今一つの唐代小説の特色、面白さもあると思われまます。

そして、この際大事なことは、どんなに異世界の人々が登場する物語にせよ、その発端に登場するのはこの世の人間であり、その後の物語の展開もこの世の人間を抜きにして進行するわけではないということです。「小説」は、結局は人間を描くもの、人間の体験する「不思議」を描くもので、唐代小説も現実の人間抜きに成立するものではありません。その上で再度申し上げるのですが、唐詩とは違って唐代小説では異世界との関わりが大きな特色となつてい

ます。

次に唐詩と唐代小説の違いの(c)について、唐詩では「男同士の友情を描」き、唐代小説では「男女の愛情を描」くについて、唐詩では一般に男女の愛情をおおやけに詠うことは希です。たとえば日本の和歌などとは異なって、未婚の、あるいは結婚には至らずに終わった男女が相手への愛情を詠った詩が残される例は希です。実はその希な例に白居易(七七二〜八四六)の詩があつたりするので、これも全くないとは言えないのですが、大きな傾向として、唐詩は男女の愛情を詠うよりも、男同士の友情を好んで詠う、ということは一 Generally 言われる通りです。

ところが、唐代小説では男女の愛情を描く優れた作品が数多く見られます。資料に題名のみ挙げておきました「李娃伝」、「鶯鶯伝」、「霍小玉伝」、「李章武伝」、「長恨歌伝」、「離魂記」、「任氏伝」など、唐代伝奇の代表作が並びます。しかも、先ほどの(a)(b)と関連して、人間の男女の間での愛情が描かれるのみならず、人と鬼(死者)、あるいは神仙、人に変化した虎・狐・猿などの動物との間の愛情が数多く描かれます。唐詩の世界ではタブーであったテーマが、逆に唐代小説では好んで取り上げられるわけです。

最後に（d）と（e）について、これもセットになりま  
す。唐詩が「政治への高い関心」を示す背景には「儒教的  
精神」があり、唐代小説が「官界からの逃避的傾向」を見  
せるのにはしばしば「道教・仏教的世界観」が関係してい  
ます。唐代の詩人は、特に中唐以降になると科挙の試験を  
受けて官僚となる者が多くを占めます。科挙という試験に  
はもとより儒教的な学問・教養、詩文の能力が求められま  
すから、政治への関心は自ずと養われ、そのことがまた詩  
の創作にも反映されることとなります。たとえば、白居易  
は若いころ、左拾遺という官職にあった時、政治や社会の  
あり方を批判的に詠う「新樂府」と題する諷諭詩を数多く  
創作しています。諷諭詩はその根底で儒教的な精神と結び  
ついています。

一方、唐代小説においても、物語の冒頭に登場する人物  
は、すでに官僚であったり、これから官僚になろうとする  
予備軍であったりすることが多いので、もとより儒教的な  
教養を身につけていると言えるのですが、ところがこの登  
場人物が、美しい女性に出会ったり、不思議な神仙世界に  
迷い込んだりするとたちまちこれに引き込まれ、時には科  
挙の受験すら放棄し、すでに官職に就いていてもその職を  
棄て、最後は俗世を離れて行方知れずとなる、といった結

末を迎えることさえあります。唐詩にも、科挙に落第して  
失意のうちに故郷に帰る友人を見送る詩がありますが、そ  
れは官僚社会自体を否定しているわけではありません。と  
ころが、唐代小説ではたとえば「裴航」と題する作、これ  
は後で取り上げますが、「裴航」の主人公は愛する女性を  
手に入れるために科挙の受験も眼中に入らなくなっていま  
いますし、「孫恪」の主人公は新たな勤務地に赴く途中で、  
長年連れ添った妻が元の猿の姿に戻って山の中に帰って  
いったために、任地に赴くこと自体を放棄してしまいます。  
官界からの逃避的傾向は、唐代小説にはしばしば見られる  
設定です。

さて、このように唐詩と唐代小説が描き出す世界には大  
きな違いがあるのですが、唐代小説の個々の作品には、し  
ばしば詩歌が詠み込まれています。これは面白い現象で、  
唐代に先立つ六朝志怪小説には作品中に詩が読み込まれる  
例は希で、また詠み込まれていても、詩と物語の展開との  
関係はかならずしも緊密とは言えません。

唐代小説と詩歌の関係については様々な形があつて、従  
来いろんな検討がなされてきています。たとえば、唐代に  
は白居易の「長恨歌」に対して陳鴻に「長恨歌伝」がある  
など、同一の物語について詩と散文の両方の作品がある例

が幾つも指摘される事に関する検討はその一例です。また、『本事詩』のように、ある詩自体がその物語の中心であり、その詩を巡る逸話が記されるような作品、いわば漢詩版の歌物語なども検討の対象となります。近年の研究では邱昌員氏の著書が唐代小説と詩の関係について様々な観点から詳しく総合的に論じており、また日本では早くに近藤春雄氏に「唐代小説と詩」と題する論考があり、私もそれぞれから大きな恩恵を受けました。それらの中で、本日はテーマを絞って、唐代小説の中から特に小説中に詩が挿入され、その詩がその物語を構成するうえで重要な働きをなしている作について取り上げ、検討してみたいと思います。

## 二 裴鏘『伝奇』中の詩歌とその機能

さて、これから用います主な資料は北宋のはじめに編纂された『太平広記』<sup>②</sup>で、『太平広記』には主として六朝・唐代の小説が収められています。その中でも今回特に取り上げるのは、晩唐の裴鏘が編纂した『伝奇』と題する小説集です。「伝奇」といいますと、「六朝志怪」に対する「唐代伝奇」という用語を思い浮かべてしまいますが、いま申し上げました裴鏘の『伝奇』は裴鏘が編纂した単独の小説

集の作品名です。

裴鏘は九世紀中頃、晩唐の人で、『新唐書』卷五十三・芸文志、『郡齋讀書志』卷十三などによれば、裴鏘『伝奇』はもと三卷ありましたが後に散逸し、現在見る事ができるのは、主には『太平広記』の中に残された三十話余りです。なぜ裴鏘の『伝奇』を取り上げるのかと言いますと、一つには裴鏘の『伝奇』はその編纂年代が李劍国氏が言う唐代小説の「興盛後期―伝奇集興盛期」(注②)、李氏の書参照)、つまり唐代伝奇の個別の作品集が盛んに編纂される終わりころの最も代表的な作品集であること、これが一つ。いま一つには、裴鏘『伝奇』は小説中に詩歌を挿入する割合が極めて高く、今回の検討対象にふさわしいこと、これが二つ目です。

それから今一つ、これは個人的な理由なのですが、この十数年ばかり、本学にながくお勤めしておられました赤井益久先生、それに横浜国立大学に勤務しておられました岡田充博先生と私の三人で、定期的に唐代小説を会読してまいりました。裴鏘の『伝奇』はそのうちの一つで、お二人のおかげで『伝奇』を丁寧に読むことができ、また教えられることも数多くありました。そのこともあり、裴鏘『伝奇』を取り上げることにした次第です。お二人の先生には

この場をお借りして感謝申し上げます。

さて、裴鏞『伝奇』には三十話余りの作品が残されていますが、このうち詩が含まれるのは次に挙げます二十話で、二十話の中に七言絶句四十首、五言絶句四首、五言律詩一首、合計四十五首が含まれます（失粘、仄声韻を含む。別に『詩経』、曹植の詩から摘句あり）。これは、唐代の小説集では詩を含む割合が非常に多いと言えます。また、そのほとんどが近体詩であるのは裴鏞『伝奇』の特色の一つと言えます。

- 「元柳二公」 七絶一首、「崔焯」 七絶二首
- 「陶尹二君」 七絶二首、「裴航」 七絶二首
- 「封陟」 七絶三首、「張雲容」 七絶五首
- 「鄭德璘」 七絶五首、「崑崙奴」 七絶二首
- 「張無頗」 七絶二首、「蕭曠」 七絶三首
- 「曾季衡」 七絶二首、「趙合」 七絶一首
- 「顔溶」 七絶四首、「韋自東」 七絶一首
- 「盧涵」 七絶一首、「馬拯」 七絶一首
- 「寧茵」 五絶三首、「孫恪」 五絶・七絶各一首
- 「姚坤」 七絶一首、「文簫」 七絶・五律各一首
- （「文簫」は『歳時広記』所収。唐代小説の作品集ごとの詩歌引用数については注（一）の邱氏の書に詳しい。）

さて、裴鏞『伝奇』の中の詩の役割は様々ですが、いまそのうちの代表的なものを四種に分けて取り出してみました。

- (A) 異性への誘いかけの詩
- (B) 謎を含んだ予言の詩
- (C) 正体を隠して顕わす詩
- (D) 身世を哀嘆する詩

これだけでは分かりにくいと思いますので、これから裴鏞『伝奇』の中から六篇の作品を取り上げ、いま申し上げました(A)から(D)の観点を念頭におきながら、詩が小説中にどのように取り入れられ、機能しているのか、検討していききたいと思います。

### (1) 「裴航」女性への誘いかけの詩 (A) と、 謎を含んだ予言の詩 (B)

まず、最初に、分かりやすい例として「裴航」（『太平広記』巻五〇「神仙」と題する作を取り上げます。

唐の長慶（八二二〜八二四）のころ、裴航という秀才が長江中流の鄂渚（かくしよ、現在の湖北省武昌あたり）を船で旅して

いる時、樊夫人という美しい女性に出会います。裴航は簾越しに何度か言葉を交わすうちにすっかり好きになり、直接会いたいと思つて夫人の侍女を通じて詩を一首届けさせます。左に挙げるのがその詩です。

裴航が樊夫人に贈つた詩

同爲胡越猶懷想 同に胡越と為るも猶ほ懷ひ想ふ

況遇天仙隔錦屏 況んや天仙に遇ひて錦屏を隔つるをや

儻若玉京朝會去 儻若し玉京に朝会し去らば

願隨鸞鶴入青冥 願はくは鸞鶴に隨ひて青冥に入らん

たとえ胡と越のように南北に離れていても互いに思い

あうもの、まして天上界の仙女に出会つて屏風を隔て

るのみではなおさらのこと。

もしもあなたが天宮に行かれるなら、どうか鸞や鶴に

乗つて共に天上界に入りたいものです。

この詩は樊夫人を天界の仙女に見立てて、自分もあなたと一緒に天上界に昇りたいという求愛の詩です。実はこの時は裴航はまだ樊夫人が本当の仙女だとは知らないのですが、女性を仙女に見立てて詠うのは詩によくある表現で、唐代小説中の詩の機能の大きな一つは異性に対する誘いか

けにあります。ただし、通常の唐詩には、かりに詩人が现实生活の中でそのような求愛の詩を作つたとしても、それがそのまま人の実体験とわかるかたちで詩集に残るということはごく希といつていいと思います。

相手から詩が贈られた場合、通常はお返し詩を贈るのですが、樊夫人からはなしのつぶてで、その後裴航は手を尽くしてようやく樊夫人と面会する機会を手に入れます。ところが樊夫人からは、自分はこれから夫のもとに赴くのであなたのお相手はできませんよとつれなく断られてしまい、しかし幸いお返し詩を一首贈られます。それが次の詩です。

樊夫人が裴航に返した詩

一飲瓊漿百感生 一たび瓊漿を飲めば百感生じ

玄霜搗盡見雲英 玄霜搗き尽くして雲英見る

藍橋便是神仙窟 藍橋は便ち是れ神仙の窟

何必崎嶇上玉清 何ぞ必ずしも崎嶇として玉清に上らん

……然亦不能洞達詩之旨趣。

ひとたび玉液を飲めば万感生じ、仙薬を練りつくせば

雲英が姿を現します。

藍橋はまさに神仙の住む所、どうして共に険しい玉清

境に上る必要がありますか。

ところが裴航はこの詩を読んでも、まだその本当の意味が分かりません。結句に「どうして共に険しい玉清境に上る必要がありますか」とあるので、これは自分が贈った詩の後半に、「あなたと一緒に天上界に入りたいものです」と誘いかけたのに対するやんわりとした拒否であることは分かったはずですが、一句目の「瓊漿を飲む」とか、二句目の仙薬を搗くと「雲英」が現われるとか、「藍橋」は神仙の住処だ、という句は何のことか分からなかつたはずで、それが分かるのは、このあと物語が進行していくのを待たなければなりません。それで、右の樊夫人の詩の後に原文で挙げましたように、「然れども亦た詩の旨趣に洞達する能はず」（しかし詩の本当の意味は分からなかつた）という言葉がわざわざ記入されているわけです。

このように唐代小説には、詩を挿入した後、これを読んだ主人公について、まだその本当の意味は分からなかつたといった趣旨の言葉がしばしば付け加えられます。小説の中にこのような言葉が登場するのは、そこにこの物語の語り手が顔を出しているわけで、唐代小説の作者の創作意識が見て取れます。ちなみに、六朝の志怪小説には詩が挿入

されることは希なのですが、その希な例においても、このような言葉はほとんど見られません。ここにも六朝と唐代との違いがあります。

さて、「裴航」の物語ですが、裴航は樊夫人と別れたあと、都長安に向かい、途中、右の詩の三句目に見える「藍橋」という所で茅葺き屋根の家を見つけ、喉が渴いたので水を所望します。すると老婆が出てきて、家の簾の奥に向かつて、「雲英、水を一杯もつておいで」と言い付けます。裴航は「雲英」という名前を耳にして、以前樊夫人から贈られた詩の中の言葉を思い出しますが、まだ気がつきません。簾の下から二本の手が出てきて水を差し出したので、裴航がおもわず簾をかかざると、そこには美しい女性、「雲英」が立っています。一目惚れした裴航は老婆に雲英との結婚を申し込むのですが、老婆は百日の間に玉でできた杵と臼とを持ってきて仙薬を作れば、娘をあげましようかと答えます。

その後の裴航はというと、都に着くや科挙の受験などすっかり忘れ去って、玉の杵と臼とを手に入れるために奔走し、とうとうこれを手に入れ、藍橋の老婆のところを持ち帰って自ら仙薬を練り、最後は樊夫人の詩に詠われた通り、藍橋にある洞窟をくぐって神仙世界に入り、雲英と結

婚して仙人世界の仲間入りを果たします。そして、洞窟の奥の仙人世界で再びこの物語の冒頭に登場する樊夫人与巡り会い、夫人が実は雲英の姉であり、位の高い神仙であることを知らされず。

こうして、はじめに樊夫人から贈られた詩の意味内容がすべて明らかになるわけですが、この間、読者は物語の進行とともに樊夫人の詩を随時思い出し、詩の表現との一致を確かめながら読み進めることとなります。「裴航」という作品の構成と展開において、裴航による誘いの詩と、樊夫人によるお返しとの詩とは不可欠の要素となっていると言えます。

ちなみに、科挙に合格して官僚となり出世するという人生は、当時の多くの知識人が目指した道であったわけですが、はじめにも申し上げましたように、唐代小説には好きになった女性と一緒にいるためにそのような道を放棄するという人物がしばしば描かれます。その逆に、白居易の友人であった元稹の「鶯鶯伝」のように、作品中の主人公が上京して科挙を受験するために相手の女性と別れるといった筋書きの話もあり、それはそれで物語としてのリアリティーを持ち、唐代伝奇が描き出した一つの人物像なのですが、裴航のような人物もまた唐代小説が造形した新たな

人物像であると言えるでしょう。

以上、「裴航」の中に挿入される二首の七言絶句のうち一首目は男から女へ誘いかける求愛の詩、二首目はそのお返しとの詩で、謎を含んだ、物語の今後の展開を予言する詩となっており、「裴航」という小説は詩と密接に結びついて成り立っている作と言えます。ちなみに、「裴航」は後世多くの読者を得ており、宋代以降の小説、戯曲や詞（詩余）にも大きな影響を与えています<sup>(3)</sup>。

## (2) 「封陟」女から男への誘いかけの詩 (A) と、わが身を哀嘆する詩 (D)

さて次には「封陟」（『太平広記』巻六八「女仙」と題する作を取り上げます。先ほどの「裴航」は男から女への誘いかけを詠う詩でしたが、今度は逆に女から男への誘いかけの詩です。

宝曆年間（八二五〜八二七）のこと、少室山（河南省嵩山の西峰）に住む孝廉の封陟は品行方正で学問に専心していましたが、ある晩、お供をつれた仙女がかぐわしい香りと共に天から降りてきて封陟に拝礼し、自分のもと仙人世界のもですが、今は人間世界に流されて独り身でおります。あなたが清らかで優れた学識を備えた方であるのに惹

かれ、是非ともお側においていただきたく参りました、と言います。「お側においてください」の原文「願持箕箒（願はくは箕箒を持せん）」は家事をする意ですが、これは当時の決まり文句で、要するに結婚しましようという誘いかけです。これに対して封陟は、自分は独り節を守って質素に生きているので、どうぞお帰りくださいと、仙女の求愛をはねつけます。すると仙女は、「私はこちらに着いたばかりで、まだ私の心からの思いを申し上げていません。そこで詩を一首捧げます。七日経ったらまた参ります」と言つて七言絶句を詠じて去つて行きます。仙女が言う自分の心からの思いの原文は「懇迫」ですが、この言葉は実は宮中において臣下が皇帝に書面を奉るときなどによく用いられる語で、ここでは仙女は、散文による言葉では十分に思いを言い表すことができなかつたので、それで韻文である詩の中にその思いを込めました、私の心、真実の思いはこの詩に詠じた通りです、と言つて詩を一首差し出しているわけ（註）です。

小説の中の詩のはたらきは、しばしばこのようです。つまり、人の心はあれこれ口で説明しても容易には伝わらないものだが、これを詩に表わすことで自分の本當の思いが披瀝され、相手に伝えることができる。詩に対するこのよ

うな思いが詩を詠する者にはあるわけです。一言で言えば、詩は真実の思いを語るもの、ということになります。ところが、封陟は仙女の詩に対してお返し（註）の詩を詠じようともせず、どうぞお帰り下さいというばかりです。これは詩を奉つて心中の思いを伝えた仙女に対して、もつとも手ひどい拒否の意思を示したことになります。

この仙女と封陟のやりとりは、その後も二度、合計三度繰り返されます。左に二度目の時の仙女の詩を挙げておきます。

仙女が封陟に贈つた詩 その二

弄玉有夫皆得道 弄玉夫有りて皆道を得

劉剛兼室盡登仙 劉剛と室と尽く仙に登る

君能仔細窺朝露 君能く仔細に朝露を窺ひ

須逐雲車拜洞天 須く雲車を逐ひて洞天を拜すべし

昔、穆公の娘弄玉は夫蕭史と共に仙道を得、劉綱もま

た夫婦そろつて登仙しました。

あなたも人の命の儂さをよくご覧になり、共に雲車に乗つて仙界に参りましょう。

一句目の「弄玉」も二句目の「劉剛（劉綱）」も共に夫

婦そろつて仙人であつたことで有名です。三四句は人の命ははかないものだから、仙人となる道を得て、いっしょに長生きしようというので、仙女から男への誘いかげは不老長生を共に得ることと不可分のものとなつています。

これに対して封陟はまたもや詩を返すことすらせず、ついにには仙女による三度目の来訪となるのですが、封陟は三度目もきっぱりと拒否します。封陟のあくまでかたくなな態度を見てあきれはてたのは仙女のおつきの侍女たちで、最後はとうとう、「お嬢様、こんな分からず屋は話にもなりません。いづれ落ちぶれて、あの世の幽霊となるのがおちです。神仙の連れ合いなどになれるはずがありませんよ」とののしりだすありさま。仙女もため息をつきながら、左に挙げました最後の三首目の詩を書き残し、天の彼方にさみしく帰って行きます。いわば、わが身を、身世を哀嘆する作です。

仙女が封陟に贈つた詩 その三

蕭郎不顧鳳樓人 蕭郎は顧みず鳳樓の人を  
雲澁廻車淚臉新 雲は車を廻らすに洩り 涙は臉に新た

なり

愁想蓬瀛歸去路 愁ひて想ふ蓬瀛帰り去る路  
難窺舊苑碧桃春 窺ひ難し旧苑碧桃の春

昔、蕭史は弄玉と共に鳳凰台から天に昇つたのに、あなたは私を振り向いてもくれません。天に戻る雲車の歩みは重く、涙が乾くひまなく頬に流れます。沈む心で蓬萊山への帰り道をたどつても、もはや桃の花が庭に咲く春景色は見えません。

封陟はおつきの侍女から「この木偶の坊」「木偶人」と罵られるのですが、仙女自身には封陟に未練が残つていて、右の詩の後半で、ひとり蓬萊山に帰つていかねばならぬ足取りも重く、天上のわが住処には桃の花咲く春の訪れはやつてこないだろう、と嘆いています。つまりこの詩は侍女とは違う仙女自身の偽らざる本心、「真情」を詠じているものです。そのことが具体的に示されるのは物語の最後の場面で、三年後に封陟が病で死んで冥土に連れ去られるところにちょうど行き会わせた仙女は、かつての因縁を思つて、封陟に新たに十二年の命を与えてやります。それによつて封陟は息を吹き返し、かつての自分の行為を後悔して慟哭します。

以上のように、「封陟」では仙女から封陟に三度、詩が贈られます。封陟に対する求愛の思いを詠じる最初の二首にも、それがかなわないと諦めて天に帰って行く未練を込

めた最後の一首にも、詩にこそ偽りなくまことの思い、「真情」が詠み込まれている、詩は登場人物の思いの真实性を証拠立てる役割を果たしている、そのようなものとして詩がある。もし「封陟」という作品に詩が挿入されなければ、この物語は成り立たないと言えるでしょう。

「封陟」については、別に「任生」という「封陟」によく似た話が、『太平広記』に数十年遅れて編纂された『雲笈七籤』（巻一三上）の中に収録されており、その「任生」にも詩が三首挿入されています。「任生」については今日はお話する時間がありませんが、唐代の小説には「封陟」と「任生」のようにしばしば関連する類似の話を見いだすことが出来、このことは今後とも重要な検討課題になると思います。

### (3) 「馬拯」正体を隠して頭わす詩 (C)

次に、三作目として「馬拯」（『太平広記』巻四三〇「虎」）を取り上げます。これは小説中に詩を取り入れるきわめて分かりやすい例で、『太平広記』にはいくつもの類例があります。

長慶（八二二〜八二四）のころ、処士の馬拯は各地の山々

を歩き回ることを好み、湖南にある衡山の祝融峰に登って伏虎禪師の廟にお参りします。寺には体格のよい僧侶がいて、馬拯の下僕と一緒に町に買物に行きます。馬拯がひとり堂内にいると、一人の男が麓から登ってきて馬拯に、「途中で一匹の虎が人を食らい、その後で皮を脱いで衣を着て坊さんに化けるのを見かけました」と告げます。驚いて詳しく聞けば、食べられたのは自分の下僕で、後でその僧侶が戻ってきたのを見ると、口のあたりに血が滲んでいます。この僧侶は実は人喰い虎が人間に化けていたわけです。

その晩、馬拯と男は寺の食堂じきやうに泊まって内側から鍵をかけ、中に安置されている土偶の賓頭盧びんずるに香を焚いて祈ります。賓頭盧はお釈迦様の弟子の一人の賓頭盧尊者のことで、中国ではよく寺の食堂に安置して祭ります。その賓頭盧の土偶が次のような詩を吟じます。

賓頭盧が吟じた字謎の詩

寅人但溺欄中水 寅人但だ溺る 欄中の水

午子須分艮畔金 午子須く分つべし 艮畔の金

若教特進重張弩 若し特進をして重ねて弩を張らしめば

過去將軍必損心 過ぎ去く將軍必ず心を損なはれん

人の姿をした虎は井桁の中の水におぼれ、  
午の男は良の畔の金を分けるがよい。

もし特進にふたたび弩を引かせたならば、

通り過ぎる將軍はかならずや心を損なうだろう。

(人に化した虎は井戸で溺れ死に、

馬拯は銀の皿を分け与えるがよい。

もし牛進にふたたび弩を引かせたならば、

やってくる虎はきつと心臓を射抜かれるだろう。)

この詩を耳にした二人は、前半二句については、一句目の「寅人」は虎で、「欄中」は井戸、二句目の「午子」の「午」は馬、すなわち馬拯、「良畔の金」は「銀」という漢字、といったことを解き明かすのですが、後半二句の意味が分かりません。二人は夜が明けると、僧侶に化した虎を井戸のそばに誘い出して殺してしまい、銀の皿を持って逃げだします。これは賓頭盧の詠じた詩の前半二句の意味を解き明したために行動に移すことができたことと言えます。

二人は逃げる途中で一人の獵師に出会います。獵師は道沿いに、虎が通ると矢が飛び出る仕掛けを作っており、名前を尋ねると「牛進」と答えるので、この人が賓頭盧の詩の三句目に詠われていた人物だと分かって大喜びします。

というのも、「牛」という漢字は牛篇の「犢」(子牛のこと)に通じ、その「犢」は詩の三句目の「特進」の「特」という漢字に通ずるためです。このような漢字を用いた謎を、字による謎、「字謎」といいます。

さてその後、この仕掛け弓は、井戸に突き落とされて殺された虎の仇を打とうと追いかけてきた別の仲間虎の心臓を首尾良く射貫いて倒し、これまで虎に食い殺されて魂を操られ、「佞鬼」となっていた多くの人々の正気を取り戻させます。翌朝、二人は賓頭盧の詩によって手に入れた銀の皿をお礼に獵師に分け与え、山を下りるところで物語は終わります。

この話に登場する賓頭盧の詩はもとより文学としての成熟度を云々する作品ではないのですが、人食い虎の出現に對して、馬拯等に詩によって予言的なアドバイスを行う役割を担わされています。つまり、二人はこの詩を耳にし、その意味を読み解くことによって虎に化した僧侶を井戸に誘い入れて退治するという方法を実行し、逃げる途中に出会った獵師の名が「牛進」であると聞いて詩に詠われた「特進」がこの人であることを悟り、獵師の仕掛け弓が自分達を助けてくれることを知り、最後に獵師に銀の皿を分け与えてお礼ができたのであり、この物語の展開においてこの

詩の役割はきわめて重要であると言わなければなりません。

このように、あえて謎を含んだ予言的な詩句を用いることによって物語を展開する例は唐代小説に少なくないのですが、なぜこんな回りくどい方法をとるのでしょうか。もとより、それは作品中に謎を持ち込んで読者に物語の展開に対する興味をかき立てる役割を果たしているわけですが、今ひとつ、これには理由があると考えられます。その参考となる例が、唐代伝奇小説の代表作の一つである「謝小娥伝」に見られます。今日は時間の関係ではしよつて申し上げますが、謝小娥は強盗に夫と父親を殺されるのですが、夢の中に殺された夫と父親が出てきて、自分を殺した犯人は誰々だと、それぞれが共に三字三句、計九文字の「字謎」によって伝えます。つまり犯人の名前を直接には言わず、謎々のようにして伝えます。ただし、この場合は韻文だったわけではないのですが、謝小娥は三字三句の字謎の謎が解けずに何年も苦しみ、最後にその謎を解く人物に出会って犯人が誰であるかを知り、苦勞の末に敵討ちを果たします。この筋書きについて、清朝の著名な学者紀昀は『閱微草堂筆記』（卷二一「灤陽統録三」）の中で、夫も父親も自分で直に犯人の名前を告げればいいのに、それを字謎に

して、何年もの間、妻であり娘である小娥を謎解きに奔走させたのはおかしいではないか、と疑問を投げかけています。これはもつともな意見ですが、古来、謎は韻文のような特殊な表現形式に閉じ込めて表わされることによって、後日その謎が解けて必ず実現することが約束されるものなのです。「馬拯」に見える賓頭盧の詩もまたその約束に従ったのであり、そうすることによってはじめて確実に虎を退治して無事に生還することができるというわけです。詩歌という形式は、真実を隠しながら、同時にその真実を露わにするものであったと言えます。

#### （4）「張雲容」身世の哀嘆を詠ずる詩（D）

次に取り上げます「張雲容」（『太平広記』卷六九「女仙」と題する作に見える詩は、作中人物がこれまでの人生を振り返ってその境遇を嘆く作です。これを「身世の哀嘆」と称することにします。

元和年間（八〇九〜八二〇）に薛昭という義侠心にあふれた男が、母親の敵を討って捕まった男を牢から逃がしてやったために流罪となります。薛昭は流刑地に赴く途中、田山叟という不思議な男から仙薬を渡され、逃げ道を教え

られます。薛昭が逃げ込んだのは蘭昌宮というかつて楊貴妃に縁のあつた宮殿で、そこに夜になると三人の美女が現れて薛昭と酒宴を共にすることになり、三人のうち年上の張雲容という宮女が言うには、自分は百年前の開元のころに楊貴妃に仕えていた宮女で、当時申天師という道士が玄宗皇帝や楊貴妃と親しかつたのが縁で、この道士から死後百年にしてよみがえることのできる仙薬を授かつたのだが、今がちょうどその百年目に当たります。ほかの二人(蕭鳳台と劉蘭翹)は当時殺されてそばに埋められた仲間なのです、とのこと。こうして、三人の女たちは一人ずつ詩を詠ずることになります。左がその詩です。

鳳台が詠じた詩

臉花不綻幾含幽 臉花綻びず幾たびか幽を含む

今夕陽春獨換秋 今夕陽春独り秋に換はる

我守孤燈無白日 我は孤灯を守りて白日無し

寒雲隴上更添愁 寒雲隴上更に愁ひを添ふ

花のかんばせほころばず憂いに沈み、今宵はうららかな春も秋のように寂しい。

日の射さぬ部屋で灯火を見つめれば、寒雲おおう盛り

土に愁いは増すばかり。

蘭翹が詠じた詩

幽谷暗鶯整羽翰 幽谷の暗鶯羽翰を整へ

犀沈玉冷自長歎 犀沈玉冷やかにして自ら長く嘆く

月華不忍扇泉戸 月華忍びず泉戸を扇すに

露滴松枝一夜寒 露は松枝に滴りて一夜寒し

奥深い谷間に鶯囀り羽を整え、犀の杯も珠玉も冷たい

地下に嘆くばかり。

月明かりが閉ざされた黄泉の扉を照らす寂しさ、夜露

が松の枝に滴って夜通し寒い。

雲容が詠じた詩 (韻字は「塵・神・春」)

韶光不見分成塵 韶光見ず分ちて塵と成るを

曾餌金丹忽有神 曾て金丹を餌して忽ち神有り

不意薛生携舊律 意はざりき薛生旧律を携へ

獨開幽谷一枝春 独り幽谷に一枝の春を開かんとは

日の光は見えず塵と化しましたが、かつて金丹を飲んで不思議なことが起きました。

はからずも薛昭様が昔の約束を違えず、深い谷間に一

枝の春を届けて下さったのです。

三人の詩は共に七言絶句で、このうち鳳台と蘭翹の詩は、

死後にこの墓に埋もれ、長い年月、日の差さない暗く寒い地下に埋もれて過ごす日々を詠じており、わが身を嘆きつつ、初対面の薛昭に対して、これが自分の今日までの境遇なのですよという、いわば自己紹介となっています。

これに対して雲容の詩だけは、長い間日の光を見なかったと嘆きつつも、仙薬を飲んでいたために不思議な出来事が起こり、申天師の約束通り薛昭が奥深い谷間に一枝の春を届けてくれた、一筋の光が差し込んだと、喜びを詠じています。三人の詩が詠じられたのは、自分たちが今日に至るまでの事情を口頭で語ったその直後であるわけで、これはわが身に起こった数奇な運命と今日の境遇を百年ぶりに現世の人に語ったその心中の抑えがたい思いを、それぞれ一篇の詩に凝縮したものとと言えます。

さて、三人の宮女が詠じた三首の詩に対して、今度は薛昭が唱和します。それが次の詩です。

薛昭が詠じた唱和詩（韻字は「人・塵・春」）

誤入宮垣漏網人 誤りて宮垣に入る 漏網の人

月華靜洗玉階塵 月華靜かに洗ふ 玉階の塵

自疑飛到蓬萊頂 自ら疑ふ飛びて蓬萊の頂に到り

瓊艷三枝半夜春 瓊艷の三枝半夜春なるかと

あやまつて宮殿の垣に踏み込んだのは逃亡した罪人、月明かりがひっそりと照らし出すのは塵におおわれた玉の階段。

まるで蓬萊山の頂上に飛来して、玉のように美しい三本の枝に花が咲き、夜半に春が訪れたかのよう。

薛昭の詩の前半は、逃亡の身となった罪人がこの宮殿に迷い込んだことから詠い起しているように、やはり自身自身の身世の哀嘆となっています。同時に、詩の後半になると、この詩は三人の宮女のうち、最後に詠じた雲容の詩を承けた唱和詩であることが分かります。それは薛昭の詩が雲容の詩の内容に呼応していることとともに、その詩の押韻に用いられる字が、雲容の作が「塵・神・春」であるのに対して、薛昭の作も「人・塵・春」であり、次韻詩とまではいかにないにしても和韻の作となっていることから分かります。そして、酒宴が果てた後、三人の中で雲容が選ばれて薛昭と共に一夜を過ごし、さらにはその後、申天師の予言通り、雲容は生身の体を取り戻して現世によみがえり、二人は夫婦となって共に過ごすという展開につながっていきます。ここでも、作品中に挿入される詩が物語の展開と密接に関わっています。

(5) 「鄭德璘」複雑な物語の展開を用意する

詩(A) (D)

さて、ここまで裴鋼『伝奇』中の詩歌が果たしている幾つかの役割について見てきたのですが、それはいずれも詩が小説中の必須の要素となり、物語の展開を支えているものでした。次に取り上げる「鄭德璘」(『太平広記』巻一五二「定数」)はこのような小説中における詩の緊密な働きを複雑なストーリー展開を通してよく伝える作です。邱昌員氏もこの話を取り上げています(注(一)、邱氏著書八十八頁)。「鄭德璘」には全部で五首の七言絶句が含まれており、そのストーリー展開は時間の前後が入り組んで、なかなか複雑です。

貞元(七八五〜八〇五)のころ、湘潭(湖南省中部)の尉であった鄭德璘は長沙(湘潭の北、洞庭湖南)に家があったが、親戚が江夏(湖北省)に住んでいたために、毎年会いに行っていた。途中、洞庭湖を舟で渡るのでありますが、しばしば舟に乗って菱の実を売る老人に出会い、そのたびに酒をおごっていました。

ある年、長沙の家に舟で帰る時のこと、近くに韋という姓の塩商人が所有する大きな船があり、その商人の娘が隣の舟の娘を呼んで話をしていました。すると、夜更けに川面か

ら詩を吟ずる男の声が聞こえてきた。詩を吟ずる人の姿は見えず、声だけが聞こえてきます。次に挙げるのがその詩です。

川面に聞こえてきた、男の吟ずる詩

物觸輕舟心自知 物の輕舟に触るるは心自ら知る  
風恬浪靜月光微 風恬かに浪靜かに月光微かなり  
夜深江上解愁思 夜深うして江上に愁思を解く  
拾得紅蕖香惹衣 拾ひ得たり紅蕖の香の衣に惹まるを  
……亦吟哦良久。然莫曉誰人所製也。

何かが小舟に当たったのに気が付いた。風はおだやか、浪はしずか、月の光もかすか。

夜もふけ、川面に旅の愁いをなくさめているうちに、拾い上げたのは香りが衣に染みる紅い蓮の花。

この日、夜の川面に誰かが詠じる詩が聞こえてきたことが、この物語の発端になります。この詩のポイントの一つは起句の「何かが舟に触れた、当たったのが心に分かった」という表現です。何かが舟に触れたのか。この詩ではそれは「紅蕖」つまり「紅い蓮の花」なのですが、物語が進行するにつれて、登場人物によって「舟に触れたもの」が違っ

てきます。

さて、川面に詩が吟じられると、塩商人の娘の友達はそれを聞き取って娘の持っていた紅い詩箋に書き付けます。翌々日、鄭徳璘は商人の娘が舟の窓から釣り糸を垂れているのを垣間見て、たちまち好きになってしまいます。そこで詩を一首、一尺余りの紅い絹布に書き付けて、うまく娘の釣り針にかかるように水面に流します。娘が絹布を釣りに上げると、そこには次のような詩が書き付けてあります。

鄭徳璘が塩商人の娘に贈った詩

織手垂鉤對水窓 織手鉤を垂れ 水窓に対す

紅蕖秋色艷長江 紅蕖秋色 長江に艶やかなり

既能解珮投交甫 既能能く珮を解きて交甫に投じなば

更有明珠乞一雙 更に明珠有りて一雙を乞はん

…… (塩商人の娘) 然雖諷讀、即不能曉其義。

…… (鄭徳璘) 然莫曉詩之意義、亦無計遂其款曲。

か細い手が船の窓辺に釣り糸を垂れ、秋の川面に紅の蓮が咲いているかのよう。

神女が腰の帯玉を解いて鄭交甫に贈ったように、私も美しい一对の明珠を手に入れたいもの。

詩の三句目に言う「交甫」は漢の劉向『列仙伝』に出る鄭交甫のことで、漢江で江妃二女に出会い、二女は身につけた珠を解いて交甫に与えるのですが、それを懐に入れた鄭交甫が数十歩歩くと二女は消え、懐の珠もなくなっていたという話です。鄭徳璘は鄭交甫と姓が同じ「鄭」であることを利用して、舟の窓から釣り糸を垂れる娘に対して、私にあなたの美しい珠玉を下さい。つまり、私の恋心を受け入れてください、と求めているのです。

さらにまた、詩の二句目の「紅蕖」、紅の蓮の花ですが、六朝の民間歌謡では蓮は恋愛に関わる言葉としてイメージされています。「蓮」と「憐」は音通。「憐」は恋人。その紅の蓮が長江の水に「つややかに」映っているというのは窓辺の娘の美しい姿に喩えているのですが、実はこの「紅蕖」という言葉が、二三日前の夜に偶然にも塩商人の娘が夜の川面で誰かが吟詠するのを聞きつけて、その女友達が詩箋に書き付けてくれた詩の中にもすでにあったわけで、これはもとより偶然ではなく、この物語の作者によって仕組まれたものということになります。

さて、物語は次に続きます。娘は鄭徳璘から贈られた詩を読みます。しかし、娘は塩商人の子で、詩は読むのも作るのも不得意。「鄭徳璘」の原文では詩のあとに「然して

諷読すると雖も、即ち其の義を曉る能はず」とあります。つまり読んでみただけのものその詩の意味が十分には分らなかったというのです。それでも、詩をもらってそのお返し詩ができないのは恥ずかしいので、おりよく友達が書き付けておいてくれた先日の詩箋の詩を取り出してきて、今度はこれを自分の返歌として、釣り糸に引っかけて鄭徳璘に贈ります。そして、徳璘から贈られた紅い絹の布は大切に自分の腕に巻き付けます。この行為が後で起きる出来事の重要な伏線となります。

ちなみに、塩商人の娘にとつても、贈られた詩に対してはお返し詩を返すべきだ、詩はやりとりするものだという観念があることは注意される点で、詩のやりとりを手段に思いを遂げようとする、あるいは一歩踏み込んだ関係に進もうとする場面は、唐代小説に広くみられるところです。鄭徳璘は娘から詩を返されてすっかり喜んでしまいますが、徳璘もまた娘から返された詩の意味を十分には読み解けず、原文には「詩の意味がすっかりは分からないので、それ以上思いを遂げる術もなかった」とあります。

さて、ここでこの物語の構成として興味深いのは、まず物語の冒頭に登場する詩に「何かが舟に触れた」とあるその何かは本来は「紅葉」であったわけですが、鄭徳璘がこ

の詩を読んだ時は、自分自身が詩を書き付けて女に贈った紅い絹の布と解釈したはずだということです。舟の窓辺で釣り糸を垂れていた娘が釣り上げたのはその紅い絹の布であったわけですから。二つの詩（ことに川面に聞こえてきた詩）は、ともにその意味が十分には理解されないままに、物語は次の場面に展開していきます。

翌日、娘の乗った塩商人の舟は大きいので、強い風を帆に受けて遙か先の方に行ってしまう。鄭徳璘の舟は娘の舟と離ればなれになってしまい、後に残されて無念やるかたない徳璘はその日の夕暮れ時、一人の漁師から塩商人の乗っていた舟が大風のために洞庭湖に沈没したことを知らされます。鄭徳璘は悲しみのあまり「水に沈んだ美女を弔う詩（弔江姝詩）」二首を作り、娘の靈魂を祭ってその詩を湖に投げ入れます。すると水神がこの詩を洞庭湖の水の中の王に届けます。湖の王は、溺れ死んだ者を全員呼び出すと、その中から鄭徳璘に愛された娘を、腕に紅い布を巻き付けていることを手掛かりに探しあて、地上に返して生き返らせるように命じます。

一方、悲しみに暮れる鄭徳璘は夜中になっても寝付かれず、娘からもらった詩を口ずさんでいるのですが、その時、船端に何かが当たったような気がします。そこで水の上を

明かりで照らして探してみると、溺れ死んだと聞いたあの娘が見つかります。三つ目の「舟に当たった何物か」は生き返って戻ってきた娘自身であつたわけです。舟に引き上げられ、息を吹き返した娘は鄭徳璘に、洞庭湖の王様があなたから受けた恩義に感じて私の命を助けてくれたのです、と事の経緯を説明します。しかし鄭徳璘には自分が洞庭湖の王にいったいどんな恩義を施したというのか、それが分かりません。

こうして二人は結婚するのですが、その後三年ほどして、あることがきっかけで出会つた老人の正体が実は妻を生き返らせてくれた洞庭湖の王であることを知ります。そして老人は鄭徳璘に詩を一首書き残し、もとの湖に去って行きます。それが次の詩です。

洞庭湖の王が鄭徳璘に贈つた詩

昔日江頭菱茨人 昔日江頭菱茨の人

蒙君數飲松醪春 君が数しば松醪春を飲みしむるを蒙る

活君家室以爲報 君の家室を活かして以て報と為さん

珎重長沙鄭徳璘 珎重す 長沙の鄭徳璘

昔、川のほとりで菱や茨を売つていた人（自分）は、

あなたから何杯もの銘酒を頂戴した。

あなたの奥様を甦らせてその恩に報いよう、ではお大事に、長沙の鄭徳璘殿。

この詩を読んで初めて、鄭徳璘はこの人物こそかつて舟の上で菱の実を売っており、自分が何度も酒を飲ませてやつたその老人であり、かつ洞庭湖の王にして、自分の妻を生き返らせてくれた当の人物であることを悟ります。

さて、これでこの話は終わるかというと、さらにその先があつて、一年あまりすると鄭徳璘の元に崔希周という秀才が自作の詩を編纂した巻物を持参して訪ねてきます。鄭徳璘がこれを読んでみるとその詩集の中に、「江上夜拾得芙蓉」（川のほとりで、夜に蓮の花を拾う）と題する詩があり、この詩こそかつて今の妻が自分に贈つてくれた紅い詩箋に書き付けられた詩だったので。そこで、不審に思つた鄭徳璘が崔希周に問いただしたところ、崔は、「数年前、小舟を鄂渚に泊めたのですが、川面に明るく月が照つて眠れずにいたところ、何か小さな物が船にぶつかつて良い香りがしてきました。すくい上げて見ると、一束の蓮の花だったので。そこで詩を作り、出来上がつてからしばらく口ずさんでおりました」と言うのです。鄭徳璘は感嘆して、「これこそ運命だったのだ」と言い、その後、二度と洞庭湖を

渡ろうとはしなかった、とようやくここで話が終わっていません。

以上のように、鄭德璘は崔希周の話を聞いて、この数年來、自分の身の上に起きた出来事のすべてが、崔希周がある月夜の晩に洞庭湖の川面で口ずさんだ一首の詩から始まったことを悟ります。「鄭德璘」という物語は、作品中に登場する「詩」そのものが物語の展開を用意し、作中人物自身も気がつかない謎を少しずつ解き明かして、最後に物語の全体を、大きな輪をぐるりと巡って一つにつなぎ合わせるように、完結させます。実はいま長々と説明したストーリーにもすでに省略した部分があり、実際はもっと複雑です。「鄭德璘」という物語は五篇の七言絶句を抜きにしては成り立たない作であり、作中の詩は謎をかけるもの、謎を潜ませるものであると同時に、後日、謎は必ず解き明かされ、真実を明らかにするものでもあるのです。この点は、先の「馬拯」に登場した賓頭盧の詩とも、その機能と同じくするといつてよいでしょう。ただし、賓頭盧の詩の方はずいぶん単純です。また、賓頭盧自身が謎の詩の解を知っていて詠じているのに対して、崔希周自身は自分の詩がその後、何人もの運命を巻き込んでいくきっかけとなるとは思ってもいなかったわけで、この詩にそのような役

割を設定しているところに、「鄭德璘」という作品における詩の挿入の巧みさが指摘できます。

考えてみると、詩は散文とは違って意味内容を直接には明示せず、散文以上に読者にその意味する所をつとめて読み解くことを要求します。詩はしばしば表に現われていないことを包み隠すようにして表現しますが、また同時に隠されたものを読み解くことによって、かえって真実が露わとなります。「鄭德璘」のように唐代の小説には、詩を引用した後に「その意味はまだよくは分からなかった」という表現が書き加えられることがよくあります。また、意味が分からないでいるのは作中の主人公であるとともに、読者自身でもあります。そうして、物語を読み進めるうちに、詩の内容が徐々に明らかになり、最後にすべてが明らかになるとともに、物語も完結します。いわば、物語の展開が詩によってあらかじめ仕組まれているのです。これはその物語が虚構であることを意識した書き手でなければできないことではありません。「鄭德璘」はその典型的な例といつてよいでしょう。

## (6) 「韋自東」偽りの詩

さて、最後に取り上げるのは「韋自東」(『太平広記』卷三五六「夜叉」と題する作で、これに見える詩は始めに申し上げました裴鏞『伝奇』の中の詩の四種の役割、(A)から(D)の分類には入りません。詩は真実を詠ずるといふ觀念を逆用した、いわば「偽りの詩」です。偽りとはどういふことなのか。「韋自東」はその後半部分が唐代伝奇小説の中でも有名な「杜子春」の類話として知られる作で、こんな話です。

貞元(七八五〜八〇五)のころ、義侠心にとみ、恐ろしい夜叉でさえ打ち殺す力を持った韋自東という人物がおりました。それを見込んだ一人の道士が、この韋自東に仙薬作りの協力者になつてくれるよう依頼します。道士は韋自東に、自分は今晚洞窟の奥で仙薬を完成させる。そこで、邪魔者が入らないように、明日の夜明け方、五更になるまで、あなたは剣を持って洞窟の入り口に立ち、怪しい者が来たらすべて剣で切りつけてほしい、と頼みます。韋自東は承知し、次々に現われる大蛇や怪しい美人に切りつけるのですが、夜明けごろになつて、一人の道士が雲に乗つて降りてくると韋自東をねぎらつて、「妖魔はいなくなつた

ぞ。うれしいことに我が弟子の仙薬も出来上がった。いま詩を一首作つたから、おまえも唱和するがよい」と言つて、韋自東に次のような詩を示します。

偽の師匠が韋自東に贈つた詩

三秋稽顙叩真靈 三秋稽顙して真靈に叩し

龍虎交時金液成 龍虎交はる時金液成る

絳雪既凝身可度 絳雪既に凝りて身は度るべく

蓬壺頂上彩雲生 蓬壺頂上彩雲生ず

自東詳詩意曰、此道士之師。

三年もの間 叩頭して真靈にぬかずき、龍虎交わつて

金液は完成した。

絳雪が凝結して身は済度し、蓬壺の山頂には美しい雲がたなびいている。

これは仙薬が完成したことを言祝ぐ詩です。しかも空から降りてきたこの道士は、自分はいま仙薬を完成させた洞窟の中の道士の師匠であると言ひ、韋自東に「汝可繼和(汝繼ぎて和すべし)」、自分の詩に唱和しなさいと誘いかけています。しかし、実は詩を作つて韋自東にも唱和させようとした人物は妖魔の類であつて、仙薬の完成を詠うこの詩

の内容も偽りでした。しかし韋自東にそれは見抜けず、原文では七言絶句の直後に、「自東 詩意を詳らかにして曰はく、『此れ道士の師なり』と」と言わしめています。つまり韋自東は、詩の意味が自分にはよく分かったと思つたからこそ、これは本当に道士の師匠であると確信したわけです。妖魔による様々なまやかしを切り捨てた韋自東も、詠じられた詩の内容を理解することによって、これこそ真実だと考えてしまつたのです。ここに、「詩」というものは事の真実を証するもの、という觀念の存在を読み取ることができます。しかし、実はこの詩こそ真実を装つたまやかしでした。韋自東が剣をおさめて偽の師匠に礼拝した途端、偽師匠は洞窟に飛び込んでいきます。つまり礼拝した途端に韋自東による防御が破れた訳で、仙薬を練っていた鼎は爆発し、仙薬は完成せず、すべては元の木阿弥となつてしまします。

このように、「韋自東」の物語は詩は真実を証するものという觀念を巧に逆用したものとと言えます。

ちなみに、妖魔のものが韋自東に偽りの詩を詠ずる際に「汝継ぎて和すべし」と誘いかけた、この「継ぎて和す」、「継和」という言葉は、主には唐代伝奇が盛んに書かれた中唐ころから新たに詩に用いられ始めた言葉です。詩人では劉

禹錫（七七二～八四二）や白居易（七七二～八四六）の詩に登場し、それ以前の詩では武元衡（七五八～八一五）の作に見えるくらいです。「韋自東」は唐詩においてこの語が使用され始めた後、やや遅れてこの語を作中に用いていることになりました。

### 三 おわりに

以上、主には裴鉞『伝奇』中の作品を中心に、小説の中に登場する詩歌がその物語においてどのような機能、役割を果たしているのか、という問題を巡ってお話ししてきました。一応のまとめと、今回は触れることの出来なかつた補足を申し上げますと、以下のようなふうかと思ひます。

一つには、六朝時代とは異なつて、唐代の小説には作品中に詩歌を挿入する例が少なくないこと。このこと自体は従来から言われているところです。また今回は具体的な数字を挙げませんが、私の調査したところでは、『太平広記』の部門による分類で言えば、唐代伝奇の代表作が取められる「雑伝記」に詩が多いことは無論、「神仙」「女仙」「夢」「神」「鬼」「妖怪」「精怪」「畜獸」「雑録」などに比較的多く出現します。今回取り上げた裴鉞『伝奇』中

の詩も、「神仙」「女仙」や「畜獸」の一つである「虎」に分類される作品中の作が主でした。

二つには、唐代における小説と詩歌の結びつきには様々な形があるが、裴鏞『伝奇』について言えば、「異性への誘いかけの詩」など、(A) から (D) の四点を指摘することができること。そして、それらによって、濃淡の差はあれ、詩が物語の構成と展開とに密接に関わっており、そこに虚構、フィクションによる創作意識が看取できること。

三つには、唐代小説中の詩の役割について、「詩」は「真実」を述べ伝えるものであるという観念が認められること。そのさいの小説中の詩の真実とはもとより現実におけるそれではなく、作中における真実、創作された真実です。その性質を唐代小説は意識的に利用しています。

ちなみに、後世の小説、『清平山堂話本』、『三国演義』、『西遊記』などには「有詩為證」（詩有りて証と為す）、つまり「それが証拠にこんな詩があります」という定型化した決まり文句とともに物語の中にしばしば詩が挿入されることがあります。一方、『太平広記』中の唐代小説には後世の小説に見られるような定型化した詩の挿入は見られませんが、作品ごとに必要に応じて詩が挿入されているだけです。言い換えれば、唐代では、少なくとも裴鏞『伝奇』では、

不必要に小説中に詩が登場するわけではないということになります。

四つには、(A) から (D) の四点は、(D) の「身世を哀嘆する詩」を除いては通常の唐詩では希であること。すぐれた唐詩にわれわれは深い文学性を感じますが、これに反してたとえば「馬拯」に見える賀頭盧の詩は文学性以前の作でしょうし、「裴航」に登場する樊夫人による予言的な詩も、それ自体に感動を覚えることはないかも知れません。しかし、それが小説の一部となるとき、その詩はその小説にとって欠くべからざる存在となり、そうして出来上がった小説は「裴航」のように後世の文学にも大きな影響を与える文学作品となります。そうであれば、われわれは唐代の詩というものを小説中の詩も含めて、より多様な性質や機能をもった作品として捉えることが必要なのではないでしょうか。

最後に、通常の唐詩には見られて唐代小説中の詩には見られないテーマにはどのようなものがあるかという点、一つは政治や社会、風俗などを批判する諷諭の詩、いま一つは日常の何気ない出来事を描いた日常生活の詩、この二つは唐代小説中にはなかなか見当たりません。おもしろいことに、諷諭の詩と日常生活の詩の両方に優れた作品を数多

く残したのは、唐代では白居易です。ことに白居易の日常生活を題材にした詩は、次の宋代の詩風につながる新たな傾向として評価されます。その一方で白居易には唐代伝奇と密接に関わる「長恨歌」があり、また不思議なできごとを記す「記異」と題する散文があつて、共に『太平広記』に収録されています。<sup>(3)</sup>さらに、白居易の身近な人物として、弟に「李娃伝」の作者白行簡、親友に「鶯鶯伝」の作者元稹があり、白居易周辺には伝奇小説と非常に関りの深い人物がいることが知られています。唐代の半ばころには、白居易のように唐詩の世界と唐代小説の世界とその両方に跨がった人物が出現しているのです。どうしてこのような人物が出現したのか。時代がそうさせたと言えばそれまでですが、本日の話の冒頭に、自分が唐代の詩とともに小説を讀んできたのは、詩と小説の両方を読んではじめて唐という時代やその文学が分かる気がするからと申し上げましたのも、結局この点に関わつてくるのであらうと思われまます。

まだ説明の足りない点も多いかと思いますが、時間もきましたので、このあたりで終えることと致します。今日は私の拙い話をお聞き頂き、どうもありがとうございます。

## 注

(1) 邱昌員『詩与唐代文言小説研究』（中国社会科学出版社、二〇〇八）、近藤春雄『唐代小説の研究』所収「唐代小説と詩」（笠間書院、一九七八）。

(2) 『太平広記』五百巻は北宋・李昉等編、太平興国六年（九八二）刊。明嘉靖四十五年談愷刻本等の諸本があり、中華書局排印本（一九六二）が流布。近年では、張國風『太平広記会校』全二十冊（北京燕山出版社、二〇一一）がある。『太平広記』中の個々の作品集については、李劍国『唐五代志怪傳奇叙録』（南開大学出版社、一九九三。同増訂本、中華書局、二〇一七）参照。

(3) 「裴航」と宋詞に与えた影響については、拙稿「唐代伝奇小説『裴航』と宋詞―楊沢民「倒犯（藍橋）」を中心に―」（『新しい漢字漢文教育』第七〇号、二〇二〇年六月）参照。その冒頭に、宋代以降の文学における「裴航」の影響について記す。

(4) 仙女が封陟に贈つた最初の詩は左の通り。

謫居蓬島別瑤池 蓬島に謫居せられて瑤池に別れ  
春媚烟花有所思 春は烟花に媚しく思ふ所有り

爲愛君心能潔白 君が心の能く潔白なるを愛するが為に

願操箕箒奉屏幃 願はくは箕箒を操りて屏幃に奉ぜん

(5) 「長恨歌」は『太平広記』巻四八六・雜伝記に「長恨傳」と題して、「記異」は同巻三四四・鬼に「王喬老」と題して収録。

〔キーワード〕 唐代小説、唐詩、裴鏘『伝奇』、小説中の詩、虚構に  
よる創作